

空間分類と民俗「衛生」観念

——清潔・不潔観について——

Space Classifications and Ideas of the “Dirty” in Japan

馬場 優子

Yuko M. Baba

1. はじめに

ロロヘアが何かを探しているらしく、台所の戸棚の中や上を一生懸命に見ている。それからオープンの上や横、大鍋の下、缶詰類や塩、小麦粉その他の食料品が積み上げてある棚をのぞいている。ベッドの上も下も調べている。電話器が置いてある居間の台、新品のフォークやナイフや皿類が入ってある戸棚も検分している。「何を探しているの?」と訊くと、「私の靴、見かけなかった?」^①

数日前トイレの中の汚れてじめじめした床の上に転がっていた本が食卓の上ののっている! 雑然とたたんだテーブル・クロスや布巾類と混ぜ合わさって……。そのクロス類でパンやイモ類を包むのに……。私は、家の人々がいない隙にその本をつまんで入口近くの床にそっと置き、二度とテーブルに戻らぬよう願いました。それが翌日にはまたテーブルに戻っているのです。^②

洗面台の脇の掛け釘に掛っていた男物のスポーツ・シャツ。この家の主人ピタソニが普段着に着ていたものだが、まだあまり傷んではない。釘から床に落ちて誰も拾わないので、洗面台の前からトイレの中へ、次にシャワー室の前へ、さらに台所へと何日かかけて汚れた床を移動した。その上をみな裸足や土足で踏んで歩いている。鶏処理作業の時、それで包丁を拭く。このシャツにパンや果物を切る包丁がのっている時もある。使用中の皿やカップがこのシャツにくっついて、パンやイモをじかに包むクロスと混ざり合っても人々はまるで気にしない。私はこのシャツをそっとつまんで庭に出しておいた。だが翌日にはもう再び台所に戻っていた。^③

全く異質な文化との接触が表面的に行われている段階においては、一方の、あるいは双方の好奇心は充足され、友好的関係が揺がぬような錯覚におちいることがある。ところが現地調査において一方が他方の日常生活に浸り込み、もはや客人として遇されなくなった時、調査者たる「侵入者」

は「被侵入者」の真の姿に接し、意外な共通性とともには彼我の完璧なる相異に直面する。その結果、調査者に強い感情的反応を惹き起こすが、続いて調査者を自己の個人史への顧慮および自文化内における自己の社会的文化的な位置づけへ、そして自文化の客観的洞察へと導き、やがて彼我の文化の相対化、さらには基本原理の追求へと思考を向かわしめる。

筆者がポリネシアでのフィールドワークで強く感情的に反応したこととして所有の観念、時間の観念などいくつか挙げられるが、清潔・不潔観念もそのひとつであった。前記の筆者のフィールドノート的一端にそれが反映されていると思う。次の大貫の指摘にも見られるように日本人としてはこの問題に否応なく心理的、情緒的に反応せざるを得ないのである。

「……清浄が善と、また、不浄が悪と結びつき倫理にかかわりが出てくると、異なる次元に踏み込（み）……浄・不浄の観念は世界を秩序づける主要な原理としてのみならず、最も強い感情的反応を引き出しうる日本人のエトスの重要な位置を占めている。」^④

本稿は、日本人である筆者が日本文化の規準でポリネシア人を見、それと引き比べて日本人の「衛生」観念を相対化させるべく考察した試論である。〈衛生〉は言葉そのものは「莊子」に遡るが、日本においては明治時代に近代国家形成過程で現代医学とともに導入された新しい概念である。ギリシア語の *hugieiné*（形容詞 *hugieinós*）に由来し、病気の原因を探って予防に努め、健康を維持すること、これが本来の意味であったから、「衛生」観念には病因論が関わってくる。日本人の病因論においては浄／不浄、清潔／不潔という象徴的図式が重要な意味をもち、浄・清潔は「衛生的」を、不浄・不潔は「不衛生」を象徴する^⑤。従って日本人にとっては「汚い」ことは不衛生であることを意味すると言っても問題はない。しかし、必ずしも日常生活行動における清潔／不潔を病因と結びつける民族ばかりではない。初めに掲げたポリネシア人のように「汚い」ことと病因とを関係づけない民族もある。ここでは日本人が病気や健康と関係があると見なしているという意味での「(不)衛生」的行動・状況・過程に絞って考察してゆく。

日本人の清潔欲求の強さは夙に指摘されてきた。幕末に来日し、「神秘のヴェール」の内側を見たヨーロッパ人の目を惹いたさまざまな習俗のひとつが入浴である。彼らの残した日記、日誌類には、入浴が日本人の大切な習慣であり、都市であれ田舎であれ、家族風呂もしくは公衆浴場で一日に何度もどのような時間帯でも入浴を楽しんでいる様子が描かれており^⑥、彼らが日本人の清潔好き、風呂好きにいかに強く印象づけられたかが推し測られる。

現代日本においても、朝シャン、制汗剤や抗口臭剤、抗体臭剤などの大衆の消費、各種の抗菌商品の開発・利用等、清潔志向は日常生活のいたるところに見出される。その傾向は科学者をして「科学的に非ず」と発言^⑦させるほど過度なものとなり、本来の病気予防上の必要限度を超えた、総体としての健康にとってマイナスの様相をすら呈している。

この強迫神経症的とも言える清潔志向はかつて第二次世界大戦中にアメリカで行われた精神分析学に基づいた国民性研究において日本人の国民性が「肛門的性格」と規定されたことを想起させる。幼児期（「肛門期」）における、排泄器官の括約筋を自己コントロールし、衣類等を汚さないようにするための訓練は清潔のための訓練でもある。その訓練があまりに厳格に行われると、優雅だが権威主義的で、万事きちんとあるべき所にあり、一定の状況に対してそれに適った一定の行動が決まっているという、秩序を重視する儀礼主義的な性格になる一方、深層に隠された激しい攻撃欲求がある状況の下で表出し、残忍性をむき出しにするというものであった。これは「排泄訓練仮説 (Toilet

training hypothesis)」と言われたが、日本人の排泄訓練が本当に厳しいのかどうかの議論にすり代って行ってこの仮説自体は1950年代末には人類学における主要関心から姿を消した。精神分析学理論そのものが仮説であることもあり、現在、日本人の性格傾向——それがあったとして——が精神分析学的に規定されることはない。しかし、日本人の強迫神経症的傾向と清潔好きは依然として指摘される場所である。

日本人の風呂好きを高温多湿という気候風土を以て解釈する向きもある。しかし冬季の寒冷乾燥期においても入浴は日本人にとり不可欠な習慣であるからそれは一面的な解釈であろう。しかも入浴、すなわち直接的な身体の清潔への欲求ばかりでなく、日本人は、間接的に巡り巡って身体の清潔に何らかの影響を及ぼすかもしれないことにも潔癖である。たとえば、箒を考えてみよう。どの家庭でも家の内を掃く箒と外を掃くそれとは厳密に区別する。場合によっては道路を掃くものと三和土を掃くものをも区別し、また家の内でも板の間用とタタミ用の箒を区別することすらある。拭き布は廊下や板の間を拭くものを雑巾と称し、食器を拭く布巾やテーブルの上を拭く台布巾とは完全に絶対的に区別する。床の間を拭く雑巾を一般の板の間用とは区別する家庭もある。雑巾で足は拭くが手は拭かない。そして雑巾と手拭いや布巾は一緒に洗わない。洗濯後、乾す場所さえも別にする者がいる。日本人にとり、外を掃く箒で家の中を掃いたり、床を拭く雑巾で食器を拭くのは「汚い」のである。外から家の中へ「バイ菌」が入り、また床にある「バイ菌」が食器に移動し、最終的には人間の身体内に侵入するから「衛生上よくない」と日本人は思う。

こうした日本人の「衛生」観念とは全く異なる観念をもつ社会は多い^⑧。冒頭に掲げた、筆者がフィールドワークを行っているポリネシアの一島嶼社会ニウエ島もそのひとつである。しかしこの島の人々が「衛生」に無頓着で不潔を不潔とも思わない人々であるという訳ではない。空間概念が異なるのだ。空間分類システムの彼我の差異が清潔・不潔観の違いを生じたのである。

以下、日本人の「衛生」観念と空間分類をニウエ人の行動様式と対照させてより鮮明にし、1999年9月に都内の女子学生200名余に対して行ったアンケートを基にして現代の若者における空間分類と清潔・不潔観を考察する。最近、若者の間で「地ベタリアン」が散見される。これは日本人の空間範疇化を根底から変えるものなのか。我々日本人の多くは何故それを非難の目を以て見るのか。「汚い」「不潔である」と非難されつつ行っている彼らの行動をどう解釈すれば良いのか。

2. 日本人の空間分類と清潔・不潔観

あるもの、状況、現象を「汚い」と判断する時、現代日本人は「不潔な」「不衛生な」「衛生上好ましくない」という言葉に置き換えて、衛生学上の問題、より厳密に言えば病理学上の問題であると見なす。「バイ菌」、ゴミ、チリ、泥などが汚れの元凶であり、「汚い」と思う根拠は科学的であると考えるのが、そうであろうか。

M. Douglasは、現代ヨーロッパ人の清潔に関する観念およびそれに伴って行われる洗浄、磨き洗い、隔離、消毒などの潔浄のための諸行動は衛生学に絶対的基礎を置いていると見なすような医学的唯物主義に立脚している限り、彼ら自身の衛生および汚れの観念との対決を回避することになると指摘し、現代人の清潔・不潔に関する観念もまたそれぞれの社会における表象体系を表現するものと捉えて現代人の清潔／不潔観を相対化させた^⑨。

現代ヨーロッパ社会の人々の「不潔」に関する観念は病原体についての知識に支配されている。それは十九世紀における細菌の発見がもたらしたものであるが、細菌学によって変形してしまう以前から不潔観はあり、それは——すなわち「汚れ」の観念から病因論と衛生学を差し引くと——場

違う物としての汚物の定義に帰着する。この定義に従って議論を進めてゆくと、汚れたものとはそれ自身孤立した事象ではなく、一定の秩序ある体系の下で、その秩序からはみ出した不適當な要素ということになる^⑧。

人間は自然という混沌とした世界にあって文化によって秩序を獲得した。いわば連続的な世界を不連続の世界に文節化し、分類することによって秩序を得たのである。Lévi-Straussの言葉を借りれば、「分類学は秩序づけそのもの」^⑨であり、「あらゆる思考の根底を成すものは秩序づけの要求」^⑩である。分類はいかなる混沌をも凌駕し、たとえそれが感覚レベルのものであっても合理的秩序への一段階である^⑪。この様に人間は事物・事象を含めてあらゆる無秩序な体験を分類し体系化する。空間も時間も自分を取り巻く人間も自然現象も。そしてたとえば〈上と下〉〈右と左〉〈内と外〉〈男と女〉のように対立させることができる範疇の差異を明確化し、拡大し、強調して秩序を創り上げる。しかし必ずやいずれの範疇にも分類されない、はみ出しものが出現する。それは体系的秩序からはずれ、納まり切れないから場違いなところに存在して、あいまいで中途半端かつまともではないと見なされ、秩序の中心から離れた周縁部に追いやられる。それは分類体系とそれに結びついた行動の準則に矛盾し、秩序体系を混乱におとし入れ、無秩序へとつき返す危険性を宿す。いっさいのそのような事物・事象・観念を拒否しようとする反応が「汚れ」に関する行動にほかならない^⑫。従って「汚れ」概念とは、「体系的秩序からはみ出したあらゆる要素を包含する一種の全体的要約」^⑬であって相対的観念であるとDouglasは捉えた。

日本人は「汚い」という言葉を通常、ある状態におけるものの属性を表現する時に使う。泥や土、糞尿、垢、唾液、塵芥は汚い、と言う。だが唾液は人間の口腔内に在る時には「汚い」ものではない。垢は、身体に付いている時には皮膚の一部を成して不潔なものと考えないであろう。糞尿も同様、身体の内側に留まる限り「汚い」わけではない。これらは人体外に出た途端に「汚い」ものと化する。庭の泥土は地面（庭地）の一部であってそれ自体は「汚い」わけではないが、泥土の一部が手や衣類に付いたり部屋の中にこぼれ（てい）たりすると「汚い」。ゴミは不用品、使用済みのもの、役立たなくなった廃物であり、それ自体は不潔な「汚い」ものではない。しかし、それを整頓された部屋に放置しておけば「汚い」。生ゴミは動物性・植物性食料の一部であったものが食べ残されたり調理の過程で取り残されたりして迎える状態であり、生ゴミとなる直前までは人体に入る資格のある食料品であった。落した菓子はその直前に袋に入っている時までは清潔な食品であるが落すや否や「汚い」ものになり果てる。

このように「汚い」はものの固定的な属性を表わすのみならず、状況、状態、過程にも関わる動態的な言葉である。ものが然るべき所に在る限り、「汚く」はない。清潔な、整頓された所、場違いな所、本来在るべきではない所に在る（移動してくる）と「不潔で」「汚い」ものと見なされる。たとえば皿の上にある納豆は「汚く」ないが、本の上に納豆があれば「汚い」と思うであろう。

さらに範疇化された空間とものの帰属に齟齬を来たしていることに加えて、色彩・形状など視覚的な規準、嗅覚上の良否、粘性・硬軟など審美上の価値が「汚さ」を増幅する要素となり得る。

では「汚さ」の根源は何か。事物として「汚い」とされているものには塵芥、ほこり、かす、泥（土）、糞尿、唾液、痰、ダニ、落ちている毛髪、垢などがあげられるが、その「汚さ」の源は大貫も述べているように「バイ菌」である^⑭と考えられている。

日本人であれば「バイ菌が付いているから汚い」という文言は話者も聞き手も実に納得できる理由である。だがこれは衛生学的理由でありそうで、そうではない。「バイ菌」は細菌やかびなどの微生物のみならず有害な物質や汚れをも含む漠然とした概念である。「バイ菌」がついているから

「汚い」と同時に「汚い」ものには「バイ菌」がついている、と考える。つまり「バイ菌」は「汚れ」の元凶であり「汚れ」そのものでもあるのだ。

しかしながら「バイ菌」を含んだものもある一定の場所にある場合は「不潔」とは見なされない。例えば靴底の泥に「バイ菌」がついていてもそれは当然のことであり、そのこと自体は「不潔」とは言えない。そこから「バイ菌」が移動して人体に接近し、ついには人体内に侵入する過程、侵入した状態が「不潔」なのである。

それでは「バイ菌」はどこから移動・侵入してくるのか。ここに人類学や民俗学において指摘されている日本人の〈ウチ／ソト〉〈上／下〉という空間分類概念が関わりをもってくる。「バイ菌」は「ソト」「下」というカテゴリーに帰属する。それが境界をこえて他の範疇に移動してくる時、その過程と現象が「汚い」のである。

「ウチ」と「ソト」を截然と区別する日本人は「ウチ」と「ソト」では履き物を替える。同じものを履いていては「ソト」の「バイ菌」が「ウチ」に侵入するからだ。このような日本人にとって北京の故宮博物館を見学する時に靴カバー用スリッパを手渡された時のとまどいは大きい。どこで履くべきか、どこで脱ぐべきか。その疑問は見学している間中、日本人を悩ませる。日本人は「ソト」では土足で歩き、「ウチ」では裸足かスリッパを履くことを行動準則としている。しかしここでは「ソト」と「ウチ」の境界線は分からないし、表示もないのだ。一方、「土足文化」の中国人は「ソト」「ウチ」の境界など全く無頓着で、各自思い思いの地点で履き、あちこちに脱ぎ捨ててゆく。それを見た日本人はますます混乱に陥ってしまう。このスリッパの持つ意味は何であろうか、と。〈ウチ／ソト〉分類にこだわる日本人は洋式ホテルにおいても居心地が悪い。室内は「ウチ」なのか「ソト」なのか。なかには部屋の中に土足領域とスリッパ領域の境界線を自主的に設定して履き替える人もいる。

ここで前述のアンケートの自由記述部分から彼等の清潔・不潔観を窺い知るに参考となるコメントを掲げておこう。

街路やビルの廊下、地下道などはトイレその他汚れた所を歩いた靴で人が歩く所だから、そこに直接、食べ物や身に付ける物、ハンカチや手拭いなど顔や手を拭くものを置くのは不潔である。

外を裸足で歩いた足で家の中を歩いたり、土足のままで家にあがるのは外から汚れ、すなわちバイ菌が持ち込まれ、汚らしい。

食べ物や飲み物を床に置くのは汚い。

校内の廊下に腰を下ろすことはまだいいが、顔や頭など首から上の身体部分を床につけるのはとても汚い。

腰をつけて坐るベンチに顔をつけたり、ハンカチや手拭いを置いたりしたくない。

駅の階段に坐ることはあっても、食べ物を直に置くのは汚くてできない。

雑巾でテーブルの上を拭いたり食器を拭いたりするのは不潔きわまりない。たとえ洗った雑巾であっても。

テーブルの上を拭く台布巾と床拭き用の雑巾は洗濯する時も別にしなければ汚れが移る。

アンケートに記述された“汚いと思う理由”からは「見知らぬ人」や不特定多数に対する不信感や不安感、「バイ菌」を持っているかもしれないという恐怖感が浮き彫りにされた。

自宅なら汚くないが外は汚い。

人混みの多い所や人が多勢行き交う場所は汚い。

コップや箸などどんな人が使ったのかわからないものは使いたくない。何か移りそうだから。

知らない人の使いかけのコップや箸は使いたくない。何か病気を持っているかもしれないから。

「ソト」は「バイ菌」や多勢の人々の身体から離れ出たゴミやチリで汚染されている場所、すなわち“人ゴミ”であり⁹⁾、町なかや公共の場所は「バイ菌」に満ちていると認識されている。

以上のように日本人に共有されている〈ウチ/ソト〉〈上/下〉という空間の範疇化、そして「上」および「ウチ」は清潔であるのに対して「下」および「ソト」は「汚い」という認識が大貫の言う〈内・外/上・下/清潔・不潔〉という象徴的相関¹⁰⁾である。この空間秩序が守られていれば良いが、秩序体系の周縁部で異変が生じ、分類された範疇の侵犯が起こると「汚い」状況となる。しかも、「バイ菌」性の「汚れ」は日本人においては善悪規準と結びついており、「バイ菌」がついていることは「汚く」「不潔」で「不衛生」であるだけでなく、〈悪〉と見なされ、厳しく忌避されるのである。

3. ニウエ人における“汚い”概念と「衛生」

ポリネシアのニウエ島の人々の日常生活に目を転じてみると、日本人が「不潔」で「不衛生」であるとして忌避していることが特別な注意も払われず、ごく日常的に行われているのに気づくであろう。

彼らの住居は以前はココナツ葉で葺いた簡易小屋であったが、およそ10年に一度の超大型ハリケーンの襲来ごとに家屋が壊滅状態になるので1960年代初頭に宗主国ニュージーランドの援助によって島の家屋はほとんど2LDKから4LDKのコンクリート製「ヨーロッパ風」家屋となった(写真A)。床はコンクリート面に薄いリノリウム・タイルを敷いてあり、多くの家の居間にはその上



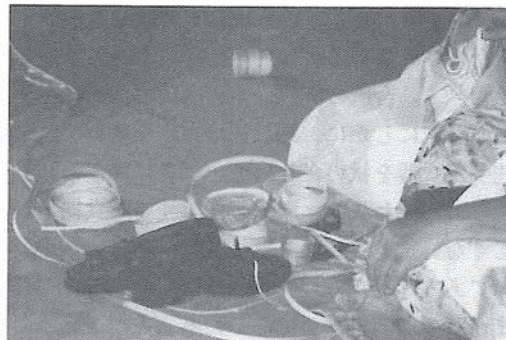
写真A

にココナツ葉で編んだマットが敷かれている。

彼らは家屋の内と外で履き物を替えることはしない。通常は内でも外でも裸足である。教会と町へ行く時のみ靴を履いて行く。尤も教会でもどこでも着くと裸足になってしまう人が多いが(写真B・C)。靴を履いている人は家の中へも靴のまま入る。そしていつの間にか脱ぎ捨てられた靴は庭、ベッドの上、下、ソファの上、下、台所、戸棚等々ありとあらゆる所に放り出され、転がっていることになる。



写真B



写真C

ゴミ箱というものはない。壊れたもの、不用品、今使わないもの、その他あらゆるものが床に、戸外に放置してある。ものを落としても拾わずそのままにしておく。脱ぎ捨てられた服も靴も部屋の内外に散乱し、積み上げられてある。捨ててあるのではない。片付けるということをしていないのだ。時々ココナツ葉で作った箒で掃除をするが、「掃除」とは大きめのゴミを外に掃き出すことと言って良い。あるいは目につく所から周囲に掃き散らすことに過ぎない。

寝室にベッドを設えてあるものの、必ずしも寝室では眠らない。昼寝は戸外か居間の床あるいはソファかデイ・ベッドで、夜はソファ、デイ・ベッド、安楽椅子、床の上、その他どこにでも思い思いの場所に横たわり、眠る。眠くなった時に居た場所で、着のみ着のまま——子どもは教会用の晴れ着を着たままのことも——眠る。寝る時間も場所も基本的には各人の自由であり、好きな時間に好きな場所で眠るという訳だ。自分の家でなくとも良い。特に子どもや未婚の若者男女は家族に断ることもなく、夜、時間を過した家にそのまま泊まってゆくこともある。歯磨きや洗面をする人は夜就寝前ではなく、出掛ける前に行くのである。しばしば居間には敷き放しの万年床があり、そこで眠る者もいる。万年床の上を——枕の上ですら——みな裸足でも土足でも遠慮せず歩く。

床の上に散乱しているのは衣類や靴ばかりではない。皿、カップ、フォーク、スプーン、哺乳ビン、枕、作りかけのクラフトやその材料、布巾、テーブル・クロス等々。初めから下に置く場合もあるが、テーブルや椅子から落ちて拾わないから床上のものが増えてゆくのである。従って屋内の床やベランダや庭地に多くのものが放置され散乱していても必ずしもそれらが捨てられたという訳ではない。置いてあるのである(写真D)。使ったポリ袋でも包装紙でも打ち捨てられて庭や部屋の隅に追いやられているように見えても、それは捨てたのではなく置いてあるのだ。必要となったらその山積みの中から当のものを探し出して使う。「捨てること」と「置くこと」が厳密に区別



写真D

されていない文化なのである。そして床がどれ程汚れていようが、そこに置いたからと言って「汚なく」なるわけでもない。下に置いたテーブル・クロスやナブキン類はパンやイモ類を置く皿の代替物となるし、残った食べ物を包むのにも使われる。

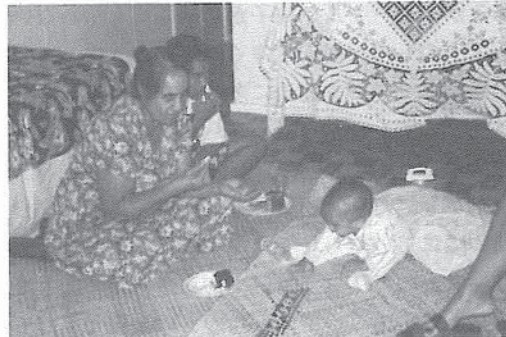
両手を使って素手で食べるのが原則だが食前に手を洗うことは全くない。ごく稀にフォークやスプーンを使うこともあり、その場合、他人が使ったフォーク、スプーン、皿、それに他人が口をつけたコップ、カップ類に対する忌避は全く見られない。見知らぬ人の食べ残しや食べかけの肉片やイモ片を食べることにも少しも躊躇しない⁹⁾。

食事の時間や場所は日曜礼拝のあとの午餐を除けば一定していない。各自好きな時に好きな場所で食べる。台所のテーブル、居間の椅子、ベランダ、庭地等々。女はしばしば子どもと共に胡座をかいて床にじかに、あるいは布巾を敷いて皿やカップを置き、食べる。その布巾はその後そのまま、洗った食器を拭いたり、テーブルに群がるハエを追い散らしたり、パンやイモ類をじかに包んだりするのに使われる。床その他で使った食器類が何日間もそのまま放置され、散乱していることも珍しくない。従って食器類が居間、寝室、台所、庭、ベランダ、車の中等々どこにでも落ちている(置いてある)。使った鍋やオープン・プレートも次回に使うまで何日間もあるいは何週間も汚れたまま台所の一隅に重ねてあったり、並べてあったりする。生ゴミはそうした鍋や皿等に盛り、置いておく。その生ゴミや食卓に出し放しになっている食料品をねらって、家の中に住んでいるネズミやゴキブリ、それにハエやアリがやって来る。また戸は通常開け放してあるから外から犬、猫、鶏が侵入し、食卓の上と言わず下と言わず食べられるものを探して食べてゆく。犬も猫も(一部の)鶏も所有者は明確なのだが“放し飼い”で餌は彼ら自ら探さねばならないのである。食欲を満たしたあとの猫がテーブルの上でひと休みして顔をこすっていることもある。家人が威嚇して怒鳴ると一たんは逃げ散るがすぐにまた戻ってくる。ここでは人間は人間だけの「合理的」「衛生的」な生活をするために動物たちを人間の生活圏から閉め出すことはないのだ。蚊、ハエ、アリその他の虫類は煩わしいので団扇で追い払うが、殺すことは絶対にしらない。人間の邪魔をしない限りにおいて、同じ食物を求める仲間として認め、調和的共存をしているのである。

このように、人間が口にされるものが足や靴、それに動物たちと直接的・間接的に接触することを拒絶も回避もせず、「上」は清潔、「下」は不潔という二元論的観念は見られない。従って、屋内、屋外を問わずどこにでも——泥土、芝生、道路、コンクリート床等々——胡座でどっかりと坐ったり横たわったり寝転んだりする(写真E)。誕生したばかりの赤ん坊と母親が地面に横臥していることも、哺乳びんが地面や床に落ちてゴム口がついても洗うことなく赤ん坊に使わせることもごく普通の光景である(写真F)。病院内においても同様で、患者も見舞客も廊下や病室で荷物を下に置いたり床に胡座したりしている。



写真E



写真F

以上、日本人の規準を以てすれば「不衛生」、「不潔」、「汚い」ことに分類される場面・状況を彼らの日常生活から取り出してみた。彼らにとってこうした行動や状況は病気をもたらす遠因でも健康を左右するものでもない。「不衛生」でも「不潔」でもないのである。また日本人のように「不潔さ」「汚さ」「不衛生さ」を善悪の規準と結びつけることをしないから、忌避すべき行動とは考えられていない。

彼らにとって病気をもたらす主因は、第一に死者の生前の「言葉」（現在は遺言も含まれる）への不服従・不実行、第二に呪いである。これらに関しては現在においても数多くの逸話が親族内で伝承されており、それらに言及する時、人々の表情や態度には緊張が走る。もちろん、ヨーロッパ人の到来後、事実としていくつかの伝染性疾患が彼らによってポリネシアに運び込まれたため、ニウエ島においても外来者（*palagi*）と伝染病を結びつけるようになった。また、雨にうたれるなど物理的な原因や食物の過剰摂取による成人病など外来の病因論が周辺の先進諸国との交流・通信の拡大に伴って流布してきたことは言うまでもない。

「バイ菌」に対応する観念はあるのだろうか。最も近いニウエ語は*moko*で、これは昆虫、その他の虫類、小型爬虫類、毛虫、イモ虫、その他這う生物の総称だが、微生物もこれに含まれる。アリ（*lo*）、蚊（*namu*）、ハエ（*lago*）、蛾（*lefio*）は*moko*の範疇には入らない。*moko*も*namu*も*lago*も*lefio*も人間と共生している生物であって、彼らにとっては人間に病をもたらすような生物ではない。従って*moko*が多く棲息する屋外の地も泥土もゴミも屋内のゴミやチリも健康を害する「不潔さ」や「不衛生さ」の因とは考えられておらず、忌避する理由はないのである。

ニウエ語にも「汚い」を表わす言葉はある。*kiva*と*pilo*で、どちらも（衣類などが）「洗濯していないから薄汚れている」、（手などが）「外作業をしたから汚れている」、「ペンキ（泥土、チョーク）がついて汚い」、「散らかっている」などと主として審美上の見苦しさを表現する。*kiva*と*pilo*の違いは語源から見て、前者が黒っぽくて色彩が暗いことを指示し、後者は嗅覚上の悪さから由来する不快感が本来の意味であったと思われる⁹⁾。後者は接頭辞をつけて「名を汚す」など社会関係に関しても使われる⁹⁾。

垢、泥、手垢、糞尿などは審美上否定的な要素で*kiva/pilo*であり、ものが散乱している状態は美しくないと彼らも思っている。しかしそれらは健康や病気とは無関係で、「不衛生」でも「不潔」でもないのだ。外見上の「汚さ」や整理整頓ができていないことは彼らの健康、病気、生命、死に関する価値体系の中で重要な位置を占めていないのみならず、善悪の規準とも結びつけられていない。また彼らの社会で人物の評価がなされる時、「きれい好き」「清潔好き」かどうかではなく、共同体への協力度、共同体内における寛容さが重要な規準となる。

以上く上/下くウチ/ソト（内/外）という空間概念が文化的カテゴリーとして意味を持っていない社会の人々の行動様式をニウエ島を一例として概観した。次章ではこうした空間対立概念が重視される日本社会の、現代の女子学生の清潔・不潔観をアンケートの結果より探ってみる。

4. 現代女子学生の清潔・不潔観念

アンケートは1999年9月都内の女子大学生204名（大妻女子大学・東京女子大学・大妻女子大学短期大学部、年齢は18才から23才まで）に対して実施した。日本人の平均像と言うには性と年齢の偏りがあるが、現代日本の都市部の若い女性の清潔・不潔観念を抽出できる。

前述のように日本人においてはある状況・過程において事物は「汚い」「不潔な」と成る。その場合、「汚い」「不潔な」は「不衛生」と同義的に使われる。この「汚さ」の源泉は「バイ菌」であり、それは塵、垢、芥、ほこりなどを含んでいる大気、湿気、水気、排泄物の中に存在すると考えられているから、そのようなものが付着したり侵入したりしやすい場所・状態は「不潔」とされるとされる。

たとえば、ものをじかに置く場合、どのような場所であれば「汚い」と見なされるか。屋内（表1 A⑦～⑩ 平均値40%）に比べて屋外を「汚い」と思う者が多い（表1 B⑦～⑩ 平均62.9%）。屋内でも個人住宅の部屋（表2 DEF⑧～⑩ 各々平均1.5%、2.4%、5.7%）に比べて校内の廊下や教室の床は「汚い」（表1 A⑦～⑩ 既出）。従って屋外を裸足で、あるいは履きものを履かずに歩くことは「汚い」として忌避される（表1 B⑫83.8%、⑬80.4%）。屋内であっても人が土足で歩く所を裸足で、あるいは履きものを履かずに歩くことには半数前後の者が抵抗を感じている（表1 A⑫55.9%、⑬47%）。ここに見られるのは、屋根や壁・戸に囲まれた建物の内部と外部の分類ではなく、土足で歩く場所と土足で歩くべきでない場所の区別であり、これを文化的空間「ウチ」と「ソト」とする。これは多数の他人が出入りする場所と少数の身内が住む場所の区分にはほぼ対応する。校内に比べて町なかの路上に対する不潔感が強いのもより素性の分からぬ不特定多数の者の歩行する場であるがため、そのような所、つまり人ごみには多くの「バイ菌」が存在すると考えられているからである。より近しい、身内の活動する場すなわち私的空間か、不特定多数の者の活動する場すなわち公的空間かによって「ウチ」と「ソト」を分類し、前者をより清潔な場所、後者をより不潔な場所とみなしていることが分かる。

「ソト」であってもベンチの上は路面に対するのとは異なる観念を抱いており、たとえ人ごみの中であっても路面より清潔であると考えられている（表1 C⑦～⑩ 平均13.8%）。「上」は「下」より相対的に清潔であると見なされているわけで、〈上・ウチ〉が相対的に〈下・ソト〉より清潔であるという概念図式がみられる。

「汚い」場所〈下・ソト〉に「汚い」ものが置かれていても不潔ではない。何をどこに置くかが状況の不潔さを決定する。今回のアンケートでは、四種の日常的な私物に関して様々な場所を挙げ、そこに置いた場合に「汚い」と思うかどうか回答させた。〈下・ソト〉という相対的に「汚い」とされる所に置いた場合に「不潔である」という反応はハンカチ・手拭いなど口や顔、手の清浄の仕上げに使用するものについて最も強かった（表1 B⑨88.7%）。逆にカバンなど内容物が堅く保護されているものについては〈下・ソト〉に置くことは比較的許容度が見られた（表1 B⑧38.2%）。（このアンケートでは“カバンやバッグ”としたが、それに対して、「カバンは良いがハンドバッグ、特に大切なものは置きたくない」との付記が多数あった。）衣類は、その中間に位置する（表1 B⑦81.4%）が、体育着やジーンズなどは置くが、大切な服や上等な服は汚したくないから置かない、と用途や素材、価値などによる区別が付記されていた。全体としてみると、身に付けるもの、直接肌に触れるもの、とりわけ顔や口という身体の上部領域に関わるものを〈下・ソト〉と接触させることへの忌避感が強いと言えるであろう。

坐る、顔や頭部を接触させる、手をつくなどの身体接触の場として不潔感が強いのはやはり屋内（表1 A④～⑥平均47.4%）より屋外（表1 B④～⑥平均68.9%）であり、屋内でも個人の住宅（表2 D④～⑦平均3.5%、E④～⑦平均6.4%、F④～⑦平均10.5%）は不特定多数の人が歩行する場所（表1 A④～⑥平均47.4%）に比べてはるかに不潔感が弱い。屋外の人ごみの甚しい場所は「汚い」（表1 B④～⑥平均68.9%）、しかし屋外ではあってもベンチの上は路面に比べると「汚い」と思われる度合いが弱い（表1 C④～⑤平均22.8%）。ここにおいても〈下・ソト〉が身体に

表 1

	「汚い」とする回答		
	A	B	C
	校内の廊下や教室の 床に(で)じかに N=204 実数(%)	町なかの街路の上に (で) N=204 実数(%)	町なかや公園のベン チの上に(で) N=204 実数(%)
①飲みかけの缶やペットボトルを置く	56(27.4)	94(46.0)	13(6.4)
②飲みかけのカップを置く	94(46.0)	119(58.3)	16(7.8)
③食べかけの弁当箱やサンドイッチ箱を置く	126(61.7)	142(69.6)	20(9.8)
④手をつく	78(38.2)	133(65.2)	11(5.4)
⑤頭をつけて寝そべる	168(82.3)	193(94.6)	82(40.2)
⑥坐る	44(21.5)	96(47.0)	/
⑦服を置く	125(61.3)	166(81.4)	32(15.7)
⑧バッグやカバンを置く	26(12.7)	78(38.2)	6(2.9)
⑨ハンカチや手ぬぐいを置く	153(75.0)	181(88.7)	69(33.8)
⑩化粧品等の小物を置く	70(34.3)	121(59.3)	26(12.7)
⑪ノートや本を置く	35(17.1)	96(47.0)	8(3.9)
⑫はだしで歩く	114(55.9)	171(83.8)	/
⑬靴下のまま歩く	96(47.0)	164(80.4)	/
⑭落ちた食べ物(乾燥している)を拾って食べる	199(97.5)	203(99.5)	/
⑮落ちた食べ物(ベトベトしている)を拾って食べる	204(100.0)	204(100.0)	/
⑯落ちた食べ物(湿気ている)を拾って食べる	203(99.5)	204(100.0)	/

表 2

	「汚い」とする回答		
	D	E	F
	タタミの部屋で(に) 床にじかに N=204 実数(%)	じゅうたん部屋で (に)床にじかに N=204 実数(%)	板の間で(に)床にじ かに N=204 実数(%)
①飲みかけの缶やペットボトルを置く	11(5.4)	16(7.8)	9(4.4)
②飲みかけのカップを置く	16(7.8)	20(9.8)	13(6.4)
③食べかけの飯椀や皿を置く	32(15.7)	43(21.1)	35(17.1)
④手をつく	0	5(2.4)	6(2.9)
⑤頭をつけて寝そべる	5(2.4)	8(3.9)	20(9.8)
⑥顔をつけて寝そべる	24(11.8)	38(18.6)	59(28.9)
⑦坐る	0	1(0.5)	1(0.5)
⑧服を置く	1(0.5)	2(1.0)	11(5.4)
⑨ハンカチや手ぬぐいを置く	6(2.9)	11(5.4)	22(10.8)
⑩化粧品等の小物を置く	2(1.0)	2(1.0)	2(1.0)
⑪落ちた食べ物(乾燥している)を拾って食べる	100(49.0)	125(61.3)	109(53.4)
⑫落ちた食べ物(ベトベトしている)を拾って食べる	196(96.1)	199(97.5)	195(95.6)
⑬落ちた食べ物(湿気ている)を拾って食べる	168(82.3)	177(86.8)	163(79.9)

とってより不潔な場所と見なされている。

身体の諸部分のうち、どこを床や路面に接触させることを「汚い」としてより忌避しているか。屋内、屋外、「ウチ」、「ソト」を問わず、腰や尻をつける、すなわち坐る（表1 A⑥21.5%；表2 D⑦0%、E⑦0.5%、F⑦0.5%；表1 B⑥47.0%）よりも手を付ける方が（表1 A④38.2%；表2 D④0%、E④2.4%、F④2.9%；表1 B④65.2%）、さらに手より顔や頭部を接触させる方が（表1 A⑤82.3%；表2 D⑤～⑥平均7.1%、E⑤～⑥平均11.3%、F⑤～⑥平均19.4%；表1 B⑤94.6%）不潔感を感じる者が多い。すなわち首から上の、口に近い部分ほど床や路面との接触を「汚い」とし、腰や足を接触させることへの忌避感はそれに比べるとより弱い。

このことは口から入れるもの、すなわち食べ物や飲み物を床や路上に置くことへの不潔感と関わってくる。それらを屋内の床に置く（表1 A①～③平均45.1%；表2 D①～③平均9.6%、E①～③平均12.9%、F①～③平均9.3%）より屋外の路上に置く（表1 B①～③平均58.0%）方への不潔意識が強い。屋内であっても、個人住宅の部屋（表2 D・E・Fの①～③前掲）より、人の多勢いる学校や教室の床（表1 A①～③前掲）の方が「人々がトイレその他いろいろな汚い場所を歩いた靴で歩く」から「汚い」。屋外であっても、路上にじか（表1 B①～③平均58.0%）に置くよりもベンチの上（表1 C①～③平均8.0%）に置く方が不潔さを感じずる者がはるかに少ない。

その場合、食べ物や飲み物がどのような器に入っているかによっても不潔感は異なってくる。缶入りドリンクやペットボトルのように開口部が狭小なものはまだ良い（表1 A①27.4%、B①46.0%、C①6.4%；表2 D①5.4%、E①7.8%、F①4.4%）。開口部の大きなカップ（表1 A②46.0%、B②58.3%、C②7.8%；表2 D②7.8%、E②9.8%、F②6.4%）、さらには弁当箱やサンドイッチ箱に入ったもの（表1 A③61.7%、B③69.6%、C③9.8%；表2 D③15.7%、E③21.1%、F③17.1%）と大気と触れ合う部分が大きく「バイ菌」がより侵入しやすいほど「汚い」と感じる者が増加する。

「バイ菌」が侵入しやすい状況を「汚い」と感じる人々は食べ物を落下させてしまった時、どう感じ、それをどう処理するか。それが乾燥した（すなわち「バイ菌」の付着しにくい）食べ物で、場所が「ウチ」の中である場合には約半数の者が拾って食べると回答した（表2 D⑩49.0%、E⑩61.3%、F⑩53.4%）が、「ソト」であれば圧倒的多数が「汚い」から拾って食べるなどとはしないと言う（表1 A⑩97.5%、B⑩99.5%）。粘着性のある食べ物を落した場合はくウチくソトを問わずほとんどの者が不潔感をもって反応した（表1 A⑪100%、B⑪100%；表2 D⑪96.1%、E⑪97.5%、F⑪95.6%）。そして水分を多く含む湿気のある食べ物の場合には前二者の中間に位置する（表1 A⑫99.5%、B⑫100%；表2 D⑫82.3%、E⑫86.8%、F⑫79.9%）。乾燥しているもの、水分を含むもの、粘着性のあるもの、と「バイ菌」やゴミ、ホコリの付きやすいものほど「汚い」として食べることを忌避しているわけである。ただし、前述のように乾燥しているものもそうだが、水分を含むものも粘着性のあるものも、個人の住宅の部屋よりも学校や教室の床、さらにそれよりも町中の路上に落ちた場合の方がより不潔感が高い。

以上のようなくウチ／上／清潔くソト／下／不潔という空間分類観念のある社会では、それぞれの空間において用いるものの使い分けをする。拭き布がその一例で、床や足を拭く雑巾でテーブルを拭いたり（表3 ⑩97.0%）、テーブル用の台布巾で床を拭いたりする（表3 ⑪70.6%）ことは「汚い」と考えられる。「上」のカテゴリーに属するものと「下」の部類に属するものの混交、すなわち「清潔」と「不潔」の融合は「不潔」な状況をもたらすのである。（後者は、「その後テーブル用として用いないのなら良い」という解釈をした者もいて数値が下がったようだ。）従って雑巾と洗面用手拭いを一緒に洗うのは「汚い」（表3 ⑫80.9%）わけである。

表 3

	「汚い」とする回答
	N=204 実数(%)
①外をはだして歩いた足で家の中を歩く	192(94.1)
②未使用の靴をはいて家の中を歩く	46(22.5)
③ホテルで、使用した(これから洗濯する)タオルを床に置く	49(24.0)
④兄弟姉妹の飲みかけのコップのジュースを飲む	18(8.8)
⑤親の飲みかけのコップのジュースを飲む	46(22.5)
⑥友達の飲みかけのコップのジュースを飲む	5(2.4)
⑦見知らぬ人の飲みかけのコップのジュースを飲む	198(97.0)
⑧兄弟姉妹の食べかけのピザを食べる	25(12.2)
⑨親の食べかけのピザを食べる	45(22.0)
⑩友達の食べかけのピザを食べる	26(12.7)
⑪見知らぬ人の食べかけのピザを食べる	204(100.0)
⑫兄弟姉妹の使った箸(はし)を使う	57(27.9)
⑬親の使った箸(はし)を使う	74(36.3)
⑭友達の使った箸(はし)を使う	51(25.0)
⑮見知らぬ人の使った箸(はし)を使う	201(98.5)
⑯テーブル用の台布巾で床を拭く	144(70.6)
⑰雑巾でテーブルの上を拭く	198(97.0)
⑱台布巾で皿を拭く	175(85.8)
⑲洗面用手ぬぐいで皿を拭く	141(69.1)
⑳台布巾と洗面用手ぬぐいを一緒に洗う	91(44.6)
㉑洗面用手ぬぐいと雑巾を一緒に洗う	165(80.9)
㉒トイレ用の手ぬぐいと布巾を一緒に洗う	126(61.8)
㉓トイレのあと、手を洗わない	186(91.2)
㉔トイレ後、洗面用の手ぬぐいで手を拭く	57(27.9)
㉕公衆の洋式トイレで便座シートをつけずに用をたす	144(70.6)
㉖自宅の洋式トイレで便座シートをつけずに用をたす	7(3.4)
㉗旅館、ホテル、医院で置いてあるスリッパをはく	39(19.1)
㉘旅館、ホテル、医院のスリッパを手でさわる	62(30.4)
㉙洗面用手ぬぐいと下半身下着を一緒に洗う	55(26.9)
㉚台布巾と下半身下着を一緒に洗う	120(58.8)
㉛雑巾と下半身下着を一緒に洗う	181(88.7)

「バイ菌」が体内に侵入する開口部として口が最も注意すべき危険な場所と考えられているので、食器を拭く布巾は他の布類から区別されなければならない。台布巾で皿を拭くこと(表3 ⑱85.8%)も、洗面用手拭いで皿を拭くこと(表3 ⑲69.1%)も「汚い」。口は身体の「上」部のカテゴリーに属するが、これに対して排泄器官は「下」に属する。従って口に直接的・間接的に接触する布類と排泄器官に接触する衣類あるいは排泄時に使用する布類とは一緒にしてはいけない(表3 ㉒61.8%、㉚58.8%)。別洗いとし、使い分けるのが当然であり、それぞれ使うべきところで使わねばならないと考えている。

洋式公衆トイレで便座シートを付けずに用を足すことに不潔感を抱く者が多い(表3 ㉔70.6% ……但し「シートがなくても予め紙で便座を拭いてから使う」という回答を含めれば数値はこれより多くなる)が、これは、ひとつには糞尿への不浄観が強い(表3 ㉓を参照。トイレのあと手を洗わないことへ不潔感を抱く者が91.2%いた)ために、可能性としての糞尿との接触への恐怖感があるが、さらに「誰が坐ったか分からない」「身近な家族は良いが他人が使ったものは汚い」というように、不特定多数者の持つ「バイ菌」への忌避感が相乗していると考えられる。

一方、旅館、ホテル、医院などで使われる、不特定多数の人の履いたスリッパを履くことへの不潔感は強くない(表3 ㉗19.1%)。日本人の公衆トイレの便座に対する不潔感の強さと公共の場における他人の使ったスリッパに対するその弱さはしばしば西欧人に不可解さを与えているが、足は身体の下のカテゴリーに分類されており、最も「バイ菌」の体内への侵入に関しては縁の薄い領域であるために不潔感が弱いのであろう。

他の人の口に触れたところに自分の口が触れることはその人の唾液が自分の口に入る「危険性」があることを意味する。しかしながら、他の人の飲みかけの飲み物を飲むこと、食べかけのピザ片を食べること、使いかけの箸を使うこと、これらはともにその「危険性」に関しては同じであるにもかかわらず、箸の共用への不潔感が最も強かった(表3 飲み物：④～⑦平均32.7%、ピザ：⑧～⑪平均36.8%、箸：⑫～⑮平均46.9%)。箸先にはさまざまな食べ物の一部が付着するが、それらは本来あるべき皿や器などから離れて箸先に残った、「場違いな所」に在るもので、その状況自体が「汚い」。従って他の人の使った箸は二重に「汚い」のである。同じことが(アンケートに入らなかったが)スプーンやフォークなどについても言うことができる。現代日本の若者はしばしば友達等と食べ物のsharingを行う。しかしその場合、他人の食べ物を器から自分の口へ運ぶ箸、スプーン、フォークのsharingは行わず、自分の使用中のものを使う。これもこの二重の「汚さ」を忌避するが故であらう。

顕著なことは、箸、食べ物、飲み物のいずれについても見知らぬ他人への不潔感の極端な強さであった(表3 ⑦97.0%、⑪100%、⑮98.5%)。「どのような病気を持っているか分からない他人の唾液」への不安感、すなわちそのような唾液に入っている「バイ菌」が自分の体内に移動してくるかもしれないという恐怖感が非常に高いことを示している。しかし一方、身近な人々の中でも不潔反応に差異のあることが明瞭となった。他の人の使った箸は「汚い」と思う者のうち、親の箸に対しては36.3%(表3 ⑬)、きょうだいの箸に対しては27.9%(表3 ⑫)、友達の箸に対しては25.0%(表3 ⑭)；他の人の食べかけのピザ片は「汚い」と思う者のうち、親は22.0%(表3 ⑨)、友達は12.7%(表3 ⑩)、きょうだいは12.2%(表3 ⑧)；飲みかけのコップは「汚い」と思う者のうち、親は22.5%(表3 ⑤)、きょうだいは8.8%(表3 ④)、友達は2.4%(表3 ⑥)であった。3項目を総合してみると、親に対して不潔感を持つ者165人(1項目平均55人、27%)、きょうだいに対しては100人(1項目平均33人、16.2%)、友達に対しては82人(1項目平均27人、13.2%)である。すなわち友達に対する不潔反応が最も弱く、反対に親に対するそれが身近な者の間で最も強いことが明らかになった。そしてその多くの回答に、親と言っても「母親のは汚いと思わないが父親のは汚いから絶対にイヤです」という類のコメントがついていた。女子学生の身近な人間関係の環の中で友達が最も中心に位置し、親——特に父親——が周縁部に位置づけられていることが分かる。

5. まとめと結語

世に汚い事物は多々あるが、それがあべき所にある限り「不潔」「不衛生」とは見なされない。

然るべき分類範疇を超えて場違いな所に移動し、異質なものとすなわち接触すべきでないものと接触した時に「不潔な」「汚い」「不衛生な」状況を呈するのである。その分類範疇は文化的に形成されたものであるから個々の文化は独自の範疇体系を持ち、同一の汚い事物がどの社会においても不潔感をもたらすという訳ではない。

一方、日本文化においてはこれまでも随所で指摘されてきたように「上／下」「内／外」という空間分類が文化的秩序を顕著に支えており、日本人の清潔・不潔観念はこの空間範疇概念と結合して「上／下」「内／外」「清潔／不潔」「浄／穢」という概念図式が共有されている。

ここでは前節で述べたように「内／外」は屋内／屋外に対応しているのではなく、土足で入らぬ場所と土足で歩く場所、言い換えれば私的空間と公的空間の対比であって、これを「ウチ／ソト」とする。「ソト」では原則として何らかの履物を履くが「ウチ」では履物を脱いで裸足になるか、別の履物に替える。あるいは「ソト」で裸足の場合は「ウチ」に入るには足を洗わねばならない。「ウチ」は清潔で「ソト」は不潔であるから明確に区別し、「ソト」の「汚れ」を「ウチ」に持込んではならないのである。また、清潔なものを不潔な所へ置くのも「不潔」で「汚い」。同じことが「上」「下」についても言える。「下」で使うものを「上」で使うのは「不潔」であり、また逆も「汚い」。この「汚さ」の根源は日本人にとっては「バイ菌」である。「バイ菌」は「ソト」や「下」に充満し、「ウチ」や「上」に範疇化されるものと接触すると分類秩序を打破って「不潔な」「汚い」状況を生ずる。それは細菌やウィルスの働きとは正確には一致してはいないことは言うまでもない。こうした空間分類に沿った秩序の下では、万事あるべき所にあり、なすべき所でなすという規範が尊重される。たとえ汚れたタオルと言えども床上に投げ置くことはせず、また、真新しい靴であっても「ウチ」で履くべきではない。雑巾はたとえ洗濯したものであっても顔や皿を拭く訳にはいかない。それぞれ用途に応じて区別した扱い方、使い方をしなければならないのである。

アンケート結果を見る限り、現代の若い女性達の間には依然として「ウチ／ソト」「上／下」の社会文化的空間範疇が概念化され、それに沿った清潔・不潔観が維持されていると言える。

確かに近年、町なかの路上に——何も敷かずに——坐り込んだり持ち物を置いたりする若者が男女を問わず見かけられるようになった。校内の廊下や階段などでもじかに坐り、カバン、ノート、本類、衣類を床面に置いてペットボトルや缶入り飲み物を飲んでる学生が珍奇とは言えない程度に増えてきた。彼らの空間分類概念の枠組は変質していないとすると何が変ったのか。何故「不潔な」「不衛生な」ことが出来るのか。

今回の試論のためのアンケート結果からは、空間の分類概念そのものではなく、「ウチ」「ソト」「上」「下」の範疇の内容の変容が指摘されよう。たとえば“服”の中でも「ソト」に属するジーンズが登場し一般化したため、それを履いている場合は「ソト」で坐っても「汚い」とは思われない。地下足袋とニッカ・ズボン（作業用ズボン）がもともと「ソト」用であって、この装束で「ソト」で坐っても横臥しても「汚い」とは思われないように、ジーンズも「ソト」用なのである。アンケートへのコメントにも「大事な服、汚れやすい服なら絶対に床や地面に坐ることはない」という記載が多かった。また、本やノートを校内の床に置くことを嫌わない者が82.9%（表1 A①）、町なかの路面に置くのを嫌わない者が53.0%（表1 B①）いたが、これも本やノートが貴重品であった時代には「ウチ」の「上」で丁重に大切に扱うべきものであったが、今やかつて帰属していたカテゴリーから移動しつつあることを反映していると思われる。最近の学生達が「不衛生」になったのでも、「清潔」意識が希薄になったのでもない。空間分類概念が変容したわけではなく、ものの帰属範疇に若干の変更が起っているのだと言えよう。

註

- ① 馬場 1994
- ② *ibid.*
- ③ *ibid.*
- ④ 大貫 1985 : 50
- ⑤ *ibid.* : 44-54
- ⑥ たとえばロバート・フォーチュン (三宅馨訳)『幕末日本探訪記』 講談社1997 109頁、リュドヴィック・ド・ボーヴォワール (綾部友治郎訳)『ジャポン1867年』 有隣堂1984 29-30頁など。
- ⑦ 藤田絃一郎 1999
- ⑧ とりわけ筆者は第22回日本民族学研究大会 (1983年、埼玉大学) における三瓶清朝のネパールと日本の清潔基準を比較した「日本の家屋空間における清潔の基準」に啓発された。
- ⑨ Douglas 1966 : 29-32 [塚本利明訳1985 68頁-74頁] 邦訳を大いに参考にはしたが、本稿では若干の語句をより適切であると考えられる語に変えて使っている。たとえば、*medical materialism*は“医学的唯物主義”とした。
- ⑩ *ibid.* : 35 [邦訳 79頁]
- ⑪ Lévi-Strauss 1962 : 17
- ⑫ *ibid.* : 13
- ⑬ *ibid.* : 20
- ⑭ Douglas *op.cit.* : 36 [邦訳 80頁]
- ⑮ *ibid.* : 35 [邦訳 79頁]
- ⑯ 大貫 *op.cit.* : 30
- ⑰ *ibid.* : 30、37
- ⑱ *ibid.* : 43
- ⑲ ただし、親が子どもの食べ残しや食べかけを食べるのは構わないが、逆に子どもが親のそれを食べることはタブー (*tapu*) である。これは *pecking order* すなわち食行動における親の優位性を象徴する規範である。
- ⑳ Sperlich 1997 : 158、268
- ㉑ *ibid.* : 284, McEwen 1970 : 131, 275

参考文献

- 馬場優子 1994 「ニウエ・フィールドノート II」
Beauvoir, L. *compte de 1881 Peking, Yeddo, San Francisco—Voyage autour du Mandé* E. Plon, Paris. [邦訳『ジャポン1867年』1984 綾部友治郎訳 有隣堂]
Benedict, R. 1946 *The Chrysanthemum and the Sword* Houghton Mifflin Co., Boston. [邦訳『菊と刀——日本文化の型』1967 長谷川松治訳 社会思想社]
Cassirer, E. 1944 *An Essay on Man* [邦訳『人間』1953 宮城音彌訳 岩波書店]
Douglas, M. 1966 *Purity and Danger* Routledge and Kegan Paul, London & Boston. [邦訳『汚穢と禁忌』1985 塚本利明訳 思潮社]
Fortune, R. 1863 *Yedo and Peking* [邦訳『幕末日本探訪記』1997 三宅馨訳 講談社]
藤田絃一郎 1999『清潔はビョーキだ』 朝日新聞社

- 池上嘉彦他 1994『文化記号論』 講談社
- Lévi-Strauss 1962 *La Pensée Sauvage* Librairie Plon, Paris [邦訳『野性の思考』1976 大橋保夫
訳 みすず書房]
- McEwen, J.M. 1970 *Niue Dictionary* Department of Maori and Island Affairs, Wellington.
- Mikame, K. 1984 "What is 'Dirty'?—A Comparison of the Categorization of Domestic Experiences between Nepal and Japan" Tachikawa, M. et al.(eds). *Anthropological and Linguistic Studies of the Gandaki Area in Nepal* II、Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa.
- Needham, R. 1979 *Symbolic Classification* Goodyear Publishing Company, Santa Monica. [邦訳
『象徴的分類』1993 吉田禎吾他訳 みすず書房]
- 大貫恵美子 1985『日本人の病気観——象徴人類学的考察』岩波書店
- Sperlich, W.B. ed. 1997 *Tohi Vegahau Niue Niue Language Dictionary* Government of Niue.
- スチュアート ヘンリ 1993 『「トイレと文化」考』文芸春秋社